解 説

—

本書は、Martin Buber, *Prade in Utopia*, 1950 の全訳であり、前に『もう一つの社会主義』と題して出版したものの改訳である。

いま、ブーバーの著作は数多く邦訳され、研究書もいくつか公刊されているので、その生涯や業績など別に述べる必要はないであろう。ここではただ、本書の理解にいくらか役立つと思われる社会的活動の面について少しとりあげることにした。

ブーバーは一八七八年二月八日ウィーンに生れ、一九六五年六月十三日エルサレムで他界した。学生時代から社会主義的思想を抱き、当時起ったシオニズム運動に参加した。しかしその当初から運動の指導者テオドル・ヘルツェルとは見解を異にし、一九〇一年中央機関紙の編集にもたずさわったが、その年の第五回シオニスト大会で公に決裂し、別に「文化的民主的反対派」を結成してその代弁者となった。

これは、ヘルツェル、ノルダウなど主流派のシオニズムが、ユダヤ国家の建設を目標とする政治的シオニズムであるのに対し、ブーバーにとってのシオニズムは、要するに、ユダヤ民族

の国民的、文化的小よび宗教的再生ないし更新を意味し、さらに全人類の再生を含蓄するものであって、その核心をなすのは独自のユダヤ教、とくに預言者の信仰の実現にあったからである。かくしてブーバーは同志たち(この中にはのちに立場を異にしたイスラエル国家の初代大統領ハイム・ヴァイツマンもいた)と共にユダヤ図書出版所を設け、また雑誌を刊行した。

この少し前、ブーバーはベルリンのある青年グループで、すでにアナキストとして活動していたグスタフ・ランダウアーを知り、生涯の親交を結んだ。ランダウアーとの出会いはブーバーにとって大きな出来事であり、ことにその社会主義思想はランダウアーにもっとも多くを負っている。一方非シオニストで「同化」の立場にあったランダウアーも、ブーバーのユダヤ主義に影響されたという。ブーバーはランダウアーの「社会主義同盟」に加わったようであるが、くわしいことは不明である。ブーバーは、私の知る限り自分のやったことなど何も直接語っていない。ただほかのことを述べたなかから、それと推測されるにすぎない。たとえば、ランダウアーが非業の死をとげた一九一九年バイエルン革命のさいにしても、おそらくその渦中にはいなかったが無関係ではなかったことは、あるとき革命指導者たちの集りで、ランダウアーが提起したテロの問題をめぐる、自分と一スバルタクス指導者との間に激論がかわされたと言っていることから知られるのである。

ところで、ブーバーは一九〇四年から五年間ハシディズム(十八世紀半頃ポーランドを中心)に東ヨーロッパに広まったユダヤ教の一派、神秘主義的傾向を含むと共に民衆的民主的。ブーバーはこれにユダヤ精神の最も純粋な顕現、「完成」を認めた)の研究に当り、シオニズム運動から遠ざかった。しかしその間、社会心理学叢書「社会」を編集出版し、一九一二年までに四十巻を出した。その中にはジンメル『宗教』、テンニースの『慣習』、オッペンハイマーの『国家』、ランダウアーの『革命』、ゾンバルトの『プロレタリア』等がある。編者としての叢書序文には、ベルリン大学で教えを受け、私的にも親しかつたジンメルの影響がみられる。

一九〇九年プラハのユダヤ人学生団体の求めでその地に赴き、ユダヤ主義について講演した。これがきっかけで再びシオニズム運動にたずさわり、中・東ヨーロッパのユダヤ青年運動に大きな役割、評伝者ハンス・ユーンによれば「精神のヒロイズム」の役割を果すことになった。運動の具体的目標はパレスティナへのユダヤ青年の入植にあった。ブーバーはこれを「聖なる道」と題する講演(一九一八年に行い、翌年ランダウアーに捧げて公刊)で「革命的植民」と名づけた。これは、ユーンの要約をかりると(Hans Kohn, Martin Buber, Sein Werk und Sein Zeit, s. 173) 次③④⑤のことを意味した。第一は全人類の再生、第二はユダヤ伝統の「純粹かつ不滅たるもの」の実現、第三は「開始しつつある人類革命における建設的要素」たるたのである。そしてこれらの現実的出発点をなすのが、パレスティナにおける新しい共同体、「労働と相互扶助の共同体の建設」であり、これが「革命的植民」また「植民革命」の当

面の目標であった。ブーバー自身その講演で、究極的に求めるものは、「シオニズムをこえて人類共同社会の更新にいたる道」であると述べ、そうした共同体的実例として死海巻物で知られるエッセネ派やハシディズム教徒などの共同体について語っている。

共同体についてのこうした考えは、宗教的含意は別として、ランダウアーにおける社会主義的ジートルング（集落または移住地）の考えと合致し、なお同様の考えを抱き、パレスティナにおいてすでに実現の企てに着手していたのがA・D・ゴールドンである。ゴールドンは一九〇四年ウクライナから移住し、最初のキブツ、デガニアAの建設に指導的影響を与えた（いまここにゴールドン記念館がある）。ゴールドンはトルストイアンともいわれるが、哲学思想や対アラブ人問題においてもブーバート共通するところがあり、また実際運動においても相協力したと見られる。ブーバーは、ゴールドンの指導する社会主義シオニスト青年団体「ハポエル・ハツァイル」（若い労働者）に一時加入し、一九二一年カルルスバードでのシオニスト大会では、この団体の代表として演説し、とくにアラブ人問題をとりあげ、パレスティナの建設がユダヤ人とアラブ人との共同の事業であるべきことを力説した。そして一九二九年にはパレスティナを訪れている。かくしてキブツ運動とのかかわりはかなり古いことになるが、これについてはあとでまたふれるとしよう。

以上によっても、ブーバーのシオニズムは独自のものであり、一般のシオニズムやナシヨナリズム、国家ナシヨナリズムとは異なることが知られるであろう。ブーバーはナシヨナリズムについて多くを論じているが、そこにはきわめて重要なものが示されていると思う。ブーバーは一九一六年、著名な哲学者でユダヤ自由主義の長老ヘルマン・コーヘンとの論争で、国家のうちに「倫理の本質」を認めるコーヘンにこう反論した。シオニズムの課題は精神的現実（民族性）の高揚、生の充溢へのその発展にある。しかしこの現実の上により高い現実、人類は国家や国民よりも大いなるものであるという現実が厳存する。それ故シオニズムの目標は、新しい国家、新しい政治体にはない。「人間として私にとって国家一般が目標でないように、ユダヤ人としての私には『ユダヤ国家』は特定の目標ではない（コーン、上掲書、一六七ページ）。

ところで、ブーバーは友人フランツ・ローゼンツヴァアがフランクフルトに創設した「自由ユダヤ人学院」に協力したが、一九二三年からフランクフルト大学でユダヤ哲学や宗教史を講じた。しかし一九三三年ナチス支配にさいして自ら職を退き、直ちにドイツ各地にユダヤ人のための成人教育センターを設け、聖書のヒューマニズムの下に苦難をきわめる人々に精神的拠りどころを与えることにとつとめた。一九三五年二月「公開非公開の一切の講演活動」を禁止されたのちも、なお一九三八年三月末までドイツに踏みとどまった。

パレスティナに移住したブーバーは、すぐエルサレムのヘブライ大学に迎えられたが、担当の講座は、正統派ユダヤ教徒の反対のため、宗教関係のものではなく、社会哲学であった。そ

ここでブーバーは社会学部の創設に尽し、最初の学部長として今日世界に誇るその基礎を築いたという。

しかし晩年の最大の活動は、イスラエル国家建設のさい、年来の主張であるユダヤ・アラブ両民族国家実現のため、ヘブライ大学学長ユダ・レオ・マグネスその他の人々と共にある団体を結成して努力したことである。ブーバーは国連派遣の調査委員会で、シオニズムの精神的基礎と目標を説明し、パレスティナに「真の正しい共同社会」を建設することが問題である旨を強調した。これを支持する人々や政党もあったが、とうてい大勢の容れるところとはならなかった。

しかし建国後もその主張に変わりなく、いまもたとえば「ニュー・アウトロック」誌に拠る人々によってうけつがれている。ブーバー自身、イスラエルに残るアラブ人たちの権利と利益を守ることに尽し、アラブ人に対する土地問題その他についての政府の不当な措置に対しては、忌憚なくその非をならした。アイヒマン裁判のさいも、当時エルサレムで親しく師事されていた縫田清二氏のお話しによると、生命の危険を招きかねないような状況のなかにあつてあくまで公然死刑に反対したという。理由はイスラエルをナチスと同じ道徳的水準におとすからというにあると、その頃日本の新聞にも報道されたように記憶するが、もっと一般的には、従来「イスラエルのための闘い」の目標の一つとした、己れの側の「集团的エゴイズム」の現れを認め

たからであろう。くりかえしになるが、ブーバーにとって「正しい」ナシヨナリズムは、「超ナシヨナルな課題」を果すことを使命とするものにほかならないのである。

二

以上、ブーバーの社会思想を現実の面から照明する意味で実際活動について述べたのであるけれども、それが独自の宗教哲学思想にもとづき、かの「われとなんじ」または「対話」の原理を基調とするものであることはいままでもない。これについては数多い邦訳のうちとりわけ『我と汝』、『単独者への問い』、『人間とは何か』などによって知ることができ、ここでくわしくとりあげる必要はないであろう。ただ一、二の点にだけふれることにしたい。

まず『人間とは何か』の終りの章から、平たい言葉にして引くとしよう。ブーバーは、現代の思惟にしみこんでいる誤った二者択一、すなわち個人主義か社会主義かを破棄しなければならぬという。いずれも人間を全体としてとらえていないからである。「個人主義は人間の一部をとらえているにすぎないし、集団主義は部分としての人間しかとらえていないからである。」しかし人間実存の基本的事実が個人自体でも集団自体でもない。両者はそれだけでは抽象にすぎない。個人は、他の個人と生きた関係を結ぶ限りにおいて実存的事実である。集団は、個人と個人との生きた関係から構成される限りにおいて実存的事実である。人間世界の固

有の特徴は、自然に類例のない事実、一存在者が他の存在者とどこまでも他者として相對しながら、両者に共通し、しかもそれぞれに固有の領域を越える領域において心を通じ合うという事実にある。この領域、この「間の」領域こそは人間的現実の原範疇である。ここに個人主義と集団主義とを越える道が指し示されており、「その認識をとおして人類が真の人格をとり戻し、真の共同体を建設すべき、真の第三の立場が暗示されている。」

ブーバーの社会主義は、いうまでもなく、この第三の立場に立つものである。そしてここで個人主義はいわゆる自由主義・資本主義体制を、集団主義はソ連流社会主義・共産主義体制を意味するものと解することができるであろう。そして「個人主義の時代はすべてに過ぎ去った」と見るブーバーにとって、問題は上の集団主義つまりはマルクス主義との対質にあることは明らかである。

次に、ブーバー社会主義が建設を目ざす共同体は、原理上われ・なんじの人格関係から成り、また神的なるものの実現される場と考えられている。これに對照されるわれ・その関係に属し、共同体ないし社会に對立するものとして本書であつかわれているのは、結局国家の問題である。両者はまた本書の随所で社会的原理と政治的原理として論じられている。社会的原理とはわれ・なんじの関係、「なんじの世界」、政治的原理とはわれ・その関係、「その世界」におこなわれる原理であり、両者は相矛盾する。すなわち強制的な政治的原理の優位は、

自発的な社会的原理の働く余地を奪い、反対に社会的原理の発展は政治的原理の必要性をそれだけ少くする。

ところで、ブーバー自身こうは説いてはいないようであるが、人間社会における権力とは、人間を対象としてのわれ・その関係、つまり人間を人格としてでなく、あたかも物であるかのように処理する性質の力であると考えることができれば、権力とその最高の組織体たる国家とに對する根源的批判の立場は、ブーバー本来のものといえるであろう。

しかし端的な国家否定、国家か無国家かの問題ではない。ブーバーには、一九五〇年へブライ大学創立二十五周年記念祭での講演、「社会と国家との間」がある。これはさきの二つの原理の「間」を意味するが、問題はこの「間」の領域をいかにしてある方向に変えるかにある。本書はまさにこの問題に對する一つの解答である。なお、ブーバーにとって国家は、人々の自治能力の不足に對するいわば仮の建物 (Notbau) なのである (七九ページ)。

本書は、「ユートピアの途」と題するけれども、一般のユートピア論やユートピア物語ではない。ここでのユートピアとは、初期のいわゆるユートピア社会主義のうちに見出し、そこに社会主義の本義が認められるとする、社会の構造的更新、すなわち「社会の細胞組織を更新することによって社会を更新する」という理念を意味し、それが実現の方途をあたかも理念自体がたどっていくかのように描いたものと思われる。しかもこの途が種々ありうることを複数で示

し、ここにもブーバーの「狭い尾根」の態度、非独断的非教条的な精神を見ることができよう。それは独自のユートピア概念に基づき、その内容は第二章で「社会主義のユートピア的要素」(この表現は英語版から)として説かれている。その要点だけを見るときしよう。

人類の精神史に現われたさまざまなユートピアは、いずれも存在すべきもの、正しいものへの想念にもとづき、そうした想念を生んだのは人間世界の現状、その倒錯と背理である。この想念は、宗教においてメシア的終末論となり、社会についてはユートピアの形をとる。終末論は時間的完成、創造の完成を意味し、ユートピアは空間的完成、「人々の共同生活のうちに宿る正しい秩序の可能性の展開」を意味する。なお終末論では神の働きが決定的であるのに対し、ユートピアではその実現のすべてが自覚した人間意志にかかっている。かくして「ユートピアは、あたかもそこに自覚した人間意志以外のいかなる要因も存在しないかのごとき社会像として特徴づけられる」(二七ページ)。

啓蒙時代以後宗教的終末論は世俗化されて社会主義的ユートピアのなかにおきかえられた。しかし宗教的終末論にはイスラエルに由来する預言者の形態とペルシアに由来する黙示録的形態とがあり、これに応じて終末論の社会主義的世俗化にも二つが区別され、その預言者の形態はユートピア社会主義のうちに、黙示録的形態はマルクス主義のうちにおきかえられた。しかしマルクス主義にも預言者の要素はいりこんだが、それは黙示録的要素に圧倒され、むしろ

黙示録的要素がユートピア化されている。ユートピア社会主義とマルクス主義とのちがいは、前者のユートピアが革命的なのに対し、後者のそれは革命的後的なことにある。「国家の死滅」とか、「必然の国から自由の国への飛躍」とかは、弁証法的には根拠づけられても、科学的には根拠づけられない(H.バーン)。

次にユートピア社会主義にも本質的に異なる二つの要素、図式的フィクションと有機的計画とがある。ともにフリーリエに見られる前者は、人間本性の理論から出発して人間のあらゆる能力を抽出し、欲求を満足すべき社会を引き出すとするものであり、解決は画一的である。これに反して後者は、人間とその条件についての非独断的な理論から出発し、時代のあらゆる傾向、濃厚くかくされた傾向にも注目し、そこから現存社会の矛盾を真に克服すべき傾向を見出さずとも、この種のユートピア社会主義がブーバーのものであることはいままでもない。

マルクス主義とユートピア社会主義とは究極の目標ではちがわないかも知れない。しかしマルクス主義では、革命勝利後のいつの日にか達成される目標とその達成に用いる手段、目標としての条件や自由と手段としての画一性や強制との間には、黙示録的ユートピアによってのみ型定まる深淵がうもれている。これに反してユートピア社会主義は目標と同じ性質の手帳を用いる。革命後の飛躍を信せず、目標に合致する現実を「いま・ここに」可能な限り作りだし、その発展拡大への途を開こうとする。また主意主義的であることもその特徴である。

なおプーバーは資本主義社会についてマルクス主義とは異なる見方、というよりも力点を異にする。プーバーにとって資本主義社会は何より構造的に貧困な、いよいよ貧困な社会である。貧困とは共同体的内容についてのことであり、したがって反対に構造的に豊かな社会とは、高度に自治的自主的な地域および機能上の共同体的諸集団とその連合体とから成る社会を意味する。しかるに資本主義とそれを支える国家の下では、社会の共同体的内容はますます空洞化されていく。これに対してユートピア社会主義者たちは、社会構造を共同体的に更新することを目ざした。それは、マルクスやエンゲルスが批判したように、片のついた過去の段階を復活しようとするものではなく、むしろ「あらゆる経済的および社会的生成の深みに認められる分散（権）的な反対傾向に結びつき、また人間精神の内奥に徐々に生成しつつある最も内面的な反抗、大衆化のおよび集団化的傾向に対する反抗にも結びついている」（二七ページ）。

以上の引用に本書全体をつらぬく基本の考えが示され、そこでは、なおあとでブルードンとランダウアーのところで述べている革命論との関連において、「更新」という言葉にきわめて重要な意味がこめられていると思う。このため、本文で多く用いられている *Restrukturierung*（構造改革とも訳すべき）をすべて序言にある *Strukturenernung* の意に訳した。（ついでに訳出のことで断っておきたいのは、二二三ページの「二、三のより小さな国」の前にある「西欧の」は、著者の書信による指示で削除したこと、終りの章「危機のさ中で」に、前に述べられていることから「世界」

という蛇足をあえて加えたことである。）

ところで、上記の目標に合致する現実、社会構造の更新をもたらすべき社会細胞とは何か。第三章以下でこれをサン・シモン、フーリエ、オウエン、ブルードン、クロボトキン、ランダウアー、またイギリスやフランスでの実現の企図をとおして探究し、さいごに、「ロッチデール開拓者」たちにもすでに考えられたという、生産と消費と合せた「完全協同組合」に到達し、その「失敗でない」実現の企図をイスラエルのキブツに見出したのである。この過程のなかで、とりわけ興味深いのは、マルクスの批判とは遠く異なるブルードンの本領が明らかにされ、またほとんど顧みられなかったランダウアーの重要性が示されている点であろう。

他方、マルクス、レーニンその他について、むしろ全面的ではなく、限られた視点からにせよ、深い理解をもって論じ批判した個所にも、きわめて鋭い重要な指摘があると思う。マルクス主義がそのいわゆる社会革命の勝利にもかかわらず、社会主義の勝利をもたらさない所以の根本のものとして、さきの言葉でいえば政治的原理優位の思想、革命政略・党政略中心の方策、結局は、レーニンのうちに典型的に示されている精神の性質と傾向（一八五ページ）、「革命によって解放せらるべき人類の新しい社会的存在を形成することに着手していない」（一六一ページ）ことなどが指摘されている。

他方プーバーは、局地的社会主義ともよぶユートピア社会主義における「いま・ここで」の

局地的実現は出発点でしかなく、それが発展拡大には「社会秩序の決定的変革」、そのため革命の必要を認めていることは、次の個所から推測することができるであろう。「共同体の再生(つまり社会の構造的更新)を語るとき、私の念頭にあるのは、恒久的世界情勢ではなくて、変革された世界情勢である」(二三七ページ)と。

しかし社会変革の支担者を究極的には階級、民族、国民などではなく、個々の人々、「魂のふるえ」を感じながら決断し、責任を負う人間(単独者)に認めるブーバーにおいては、教育つまり人間変革の問題が最も重視されていることはいうまでもない。この点にも新しい共同体の果す役割の重要な一つが存するであろう。

終りに、ブーバーがモスクワという社会主義の大きな極に対立するもう一つの極とよぶエルサレムとは、キブツ社会主義を指すものであり、これに少しくふれるとしよう。さきに述べたように、ブーバーは本書よりはるか前からキブツ運動にかかわりをもっていた。当然ならぬ影響を与えたにちがいない。またコーンはランダウアーの影響をも指摘している。しかしキブツ建設の事情はかなり複雑であり見方もさまざまである。一般的にいえば、ロシアや東ヨーロッパの社会主義シオスト青年運動に参加し、パレスティナに移住したごく少数の青年たちによって建設されたのであるが、時代により出身地によって思想的背景にもちがいがあろう。本書

に述べられている(二二四ページ)ものにつけ加える必要があるのは、ウイライナ生れのマルクス主義シオニスト、マル・ボロコフにはじまるマルクス主義の影響である。このことは、ブーバーのキブツ論にはさくわれないが、ブーバーが指摘した(二二二ページ)政治化、さらに政党化の背景には関係するであろう。国家建設にキブツは大きな働きをしたといわれるが、建国後キブツはもともと人口の約四%を占めるにすぎないキブツが、置かれた環境、大車はほぼ半数、国会議員の三分の一、多数の将官、外交官その他有力者を輩出していること、キブツ運動本来の、少くともブーバーの見地からは問題がある。上記の背景に注目するコフライ大学のタルモン教授は、「国家はキブツ人口のクリームをすくい取った」(W. O. L. Tamon, *Israel among the Nations*, 1970, pp. 164-5)キブツ運動からすれば、地味ともいえる見方が成り立ちほしくないであろうか。このほかキブツは工業化その他にも種々の問題を生じている。ブーバーも晩年失望をもらし、「指導者でなく青年に未来を託す」と語ったという(Harry Viteles, *A History of the Co-operative Movement in Israel* (Tel Aviv: 1963), p. 683) 現実には逆説的にはブーバー思想を裏づけるとも見られるであろう。しかし、キブツはそれ自体としては、まさに高度の自治と自主管理を実現したコミュニティの代表的一例であることには変わりないであろう。

ブーバーは本書は、「暴風雨がそれを開くまで、『ユートピア社会主義』の文書につみ

訳者略歴

1999年 法政大学社会学科卒業。
【著訳書】「教養の社会学」(共著)
ギョイロー「義務も問題もなき道徳」(岩波文庫)
ブルードン「所有とは何か」

「ユートピアの途」

昭和34年10月15日 第1版第1刷発行 ©
昭和47年1月30日 改訳第1版発行

定価 850円

訳者 長谷川 進
発行者 佐々木 隆彦
印刷所 文殊印刷有限公司
製本所 田代製本所

東京都新宿区赤城下町46番地
発行所 株式会社理想社
振替東京78303
電話(268)1306

落丁・乱丁のものはお取りかえいたします。
1036-588161-8905

重ねられたままにおかれるであろう」と記している。今日、日本を含めて世界のあちこちで、
共同体ないしコミュニケーション運動が若者たちの間に起っている。本書はそれに示唆するところ少く
ないであろうと思う。一九七一年八月八日

訳出においては畏友藤田栄氏と磯谷武郎氏にいくたびか教示いただいた。記して謝意を表する
ものである。

実存主義叢書

1	ジャン・ポール・サルタン著 松浪・高橋共訳	実存主義入門	¥ 750
2	ブーバニ著 児島洋訳	人間とは何か	¥ 500
3	ボルノウ著 塚越・金子共訳	実存哲学概説	¥ 800
4	マールセル著 峰七旭雄訳	存在の神秘序説	¥ 450
5	モアンリヤック著 安一井・林共訳	パスカルとその妹	¥ 750
6	一信太・エック著 信太・エック共訳	ドストエフスキー	¥ 530
7	フイ原エタ著 川原栄峰訳	ハイデッガーの存在論	¥ 680
8	ハ飯イネマ著 島・岩永共訳	実存哲学 その生けるものと死せるもの	¥ 900
9	ム竹下春日著 竹下春日共訳	実存主義案内	¥ 800
10	アールベクレス著 松浪・信三郎共訳	サルトル 人と作品	¥ 600
11	マールセリ著 渡辺・広瀬共訳	存在と所有 [増補版]	¥ 1200
12	ミユ田ラ義著 新田義弘共訳	ハイデッガーと 西洋の形而上学	¥ 550
13	ブーバニ著 児島洋訳	出会い 自伝的断片	¥ 350
14	ボルノウ著 峰七旭雄訳	実存哲学と教育学	¥ 950
15	ブ板一倉バ敏著 板一倉巴敏共訳	祈りと教え クシムディの道	¥ 400
16	レタウツ著 佐々木一義共訳	人間存在の倫理	¥ 850
17	シムベングラ著 八田恭彦共訳	運命・歴史・政治	¥ 600
18	オ荒ル木テ優著 荒ル木テ優共訳	危機の系譜	¥ 500
19	ギ山・川原著 堅山・川原共訳	ニーチェ 実存主義と権力への意志	¥ 1000

理想社